
女魔法使いAの有意義な人生白書

緋室

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女魔法使いAの有意義な人生白書

【Nコード】

N3342P

【作者名】

緋室

【あらすじ】

それなりの進学校において、ソコソコの成績を修める、すこしばかり世の中を達観している少年は、異世界に生まれ変わる。

本当に世の中は、飽きない事ばかりだ、なんて……少しばかり爺臭いと言われるかも知れないが。

一寸先は闇（前書き）

処女作というより試しに投稿してみた作品ですがよろしく願います
m () () m

一寸先は闇

カリカリカリ……。

手は休みなく記号の羅列を書き込み、眼は忙しくその先の問題を頭に入れて行く。

答えを書き込みながらも、頭は計算する事を止めない。

次々と埋まっていく答案用紙を見ていると、自分が目の前に広がる記号を書くだけの、そんな下らない機械に成り果てたような錯覚に陥る。

キンコンカンコン……。

ゴールの見えないマラソンをするが如く、苦行を続けていると、ようやく終わりを告げる鐘が鳴る。

「ふむ、終わりだ。 テストに答えを書き込むのをやめたまえ」

その言葉と同時に、ペンを机に置き、肩を鳴らしながら息を吐く。

ざわざわと皆が蠢くのを肌で感じつつも、気が抜けた体は動きそうもない。

長時間同じ姿勢を保っていたせいで腰が痛い、それ以上に目が痛い。

暫く目を瞑っていると、周りのざわめきが段々と大きくなる。

長年の宿敵　テストの答案用紙を回収している教諭も注意をするが、その仕方にも怒りよりも呆れの比率が大きい。

まあ、それも仕方ないだろう。

だって　今日でやっと学年最後のテストが終わるのだから。

「おーい、さっさと帰ろうぜ！」

テストが終わったことが余程喜ばしいのか、隣の席の友人に至っては既に帰り支度を終わらせていた。

確かテスト中は机に倒れ込んで寝ていたはずだ。

いくら成績にはほとんど影響が無いとは言っても、ああまで目立っていている、まだ教室に残っていた監督役の教諭が、目くじらを立てて目の前の友人に説教を始めるのも仕方ないだろう。

「うん、じゃあまた明日」

「うええ、おいおい、待って、俺を置いてくなってば！」

まあ、苦笑いを浮かべて帰ろうとしていた俺に対して、裏切者！とか、卑怯者！などと叫んでは更に怒られていた点については同情の余地はない。

前者はともかく、後者は自業自得だろうに馬鹿者め。

さて、あのまま待っていては日が暮れて終いそうなので、先に外に出たのはいいもの。

「……これからどうしようかねえ」

それなりの進学校において、ソコソコの成績を修めているとは言っても解く事の出来ない、今の所最大の難問がそれである。

そも、テスト前と言うことで勉強ばかりしていた為に、サイフの

中には金がある。

だが一人で遊びに繰り出した所でタカが知れているし、頼みの綱の友人は未だ学校にいる。

時間はテストが終わって直ぐに放課となったため午後二時前と言った所だ。

「……仕方ない、校門前まで来てまた戻るのも面倒だし、大人しく家で休むか」

当面の行動が決まった所で、早速涼しげな住宅街を進む。

「もう十月も半ばか、早いもんだなあ」

友人に聞かれれば爺臭いと言われること必至の台詞だ。

一人言も相まって、ますます老け込んでいく高校三年生十八歳。俺ももうすぐ卒業か、等と考えていたその時である。

何がいけなかったのだろう。

テスト終わりと言うこともあり、気が抜けて集中力が散漫していた事か。

それとも、早く帰って弟たちと遊べると言う事もあって柄にもなくハシャイで(?)いたせいか。

少なくともその日、俺の人生は余りにも呆気なく幕を閉じた。

大学に内定が決まっただけで両親も存命、弟と妹の五人家族。

そんな探せばいくらでもある中でも、きっと俺だけではないかと思う。

だってそう思わない方が可笑しいだろう。

異世界に生まれ変わったなんて人間、俺だけでいいだろうに。

本当に人生とは飽きない事ばかりだ、なんて爺臭いと言われること

必ずしも正しくない。

二階から目薬

さて、十代にしてトラックによって、しかも自分には一切の過失なく死んでしまおうと言う、ある意味大往生よりも難しい死に方をしてしまった俺ではあるが、とりあえず今の所はそれは置いておく。

問題は、自身の死を自覚しているにも関わらず大して同様もしていない俺の枯れ具合……まあこちらは生前？ ……前世でも同じように枯れていたので問題は無い。

もう一つの問題が、目の前に仁王立ちしている、身体中の毛がモツサリしたいかにも職人とも言うべきおっさんである。

背は目測でも二メートルを越えており、どこぞのボディビルダーのような筋肉を持ち、モコモコとした夏場は暑苦しそうな自前の毛皮と、縮尺を考えなければファンタジーにでてるドワーフによく似た生物と言えなくも無い。

耳は犬のように三角形のさわり心地は良さそうであり、目の前にいる今年でやっと四十路を越えるおっさんとは、一応親と子としての血縁関係のある俺に向ける目は、とても冷たい。

「……………」

先程から何かを言いたげにしては唸っているのも、それに関係があるのか分からない。

母さんは俺を産んだときに死に、その時からロクに夜泣きもせず、子供特有の我を發揮する事なく、俺と父は生きてきた。

その父が今更になって俺を自室に呼び出し、前述したような苦虫

を噛み潰したような顔をしているとなれば、もしや母を殺した恨みで？ 等と物騒な考えが浮かぶのも致し方無いとは思わないだろうか？

「……………」

どちらの口からも意味ある言の葉は出ること無く、もしかしたら一生このままでは？ と思われた時に事態は急変する。

ボタン！ と父と俺が向かい合って（睨み合って？）いる中、父の正面、つまり俺の背中側から勢い良く扉が開く。

俺もこの部屋に入る際に使った扉から入ってきた者を見てみれば、よく手入れの行き届いているだろう透き通るような髪に雪のように白い肌を持った女性が入って来ていた。

入ってくるなり父に笑顔を振り撒いていた彼女は、俺に気付く限り表情も無く俺を見つめる。

「あら、アナタ何でまだ此処にいるの？」

心底どうでもいいモノに対して向けるような言葉による恐れと、この女は一体誰なのかと言つ疑問が入り交じる。

そんな中、今まで一言も喋らなかつた父が、まるで諦めたかのように、低く地鳴りが響くような声で、俺に向かって死刑に等しい言葉を発するのだった。

「レン、私はお前との家族の縁を、今後一切断たせてもらおう」

レン、それは母が名付けた、俺の今世において十年間使い続けて来た、大事な名前だ。

追われるように家を出た時、投げ捨てられるように渡された書類、その中の身分証明の欄には、本来なら家名の入る部分には斜線が引かれ、言葉だけで無く社会的な意味でも縁を切られたと言う事を示していた。

まあ、不幸中の幸いと言うべきか手切れ金として十日は生活している金は渡されたし、十歳にして浮浪者の仲間入りと言うのもまあ、悪くは無いだらう。

十年は、喪に服するには十分過ぎる年月だ。

母に対する“娘”としての義理は、既に果たした。

魔王も勇者も居ないではあるが、ここは確かに異世界なのだ。

十年を無為に過ごした代償は小さくないが、代わりに世界をよく知る事が出来たので良しとしよう。

とりあえず、十年の間にある程度広げた交友関係の中には、一人くらい自分を引き取ってくれる奇特な奴もいるだらう。

なんて、子供らしくない子供なんだと苦笑を浮かべつつも、俺は、レインはようやく自由になれた気がした。

父が自分を捨てた事にショックを受けないでは無いが、あの様子では事情がありそうだし、等と考えつつも、元我が家を少し振り替えりつつも、町の中へと走っていく。

自由都市、リーフ。

とりあえず、宿を探さないと。冬期に突入した今では凍死しか
ねないから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3342p/>

女魔法使いAの有意義な人生白書

2010年12月19日00時24分発行